2026年1月28日掲載

経済透視図 ⑭⑥

計測機器の裾野拡大

操作性と小型化競争に

進むデータ管理

計測機器の裾野が大きく拡大している。これまでの計器の主な用途は食品、製薬が中心であったが、これら以外の分野にも活用が広がりつつある。背景には健康意識や環境意識の高まりに加え、安全安心に関する規制強化などがある。

最近では栄養補助食品による健康被害が社会問題化したこともあり、より詳細かつ客観的な検査を求める世論が高まっている。さらに、従来は職人などの人間の勘や経験に依存していた品質や味の管理についても変化が起きている。高齢化や人材不足などを背景に、データに基づいて管理しようとする動きが追い風となっている。

こうした流れは、かつて医療機関でのみ計測されてきた健康データが、健康意識の高まりや技術の進歩によって家庭に普及してきた過程と共通する。今や血圧や体温は家庭用医療機器で気軽に測定できるようになった。

医師は数値を解釈し、診断に結びつける。この役割は変わらないものの、その入り口として、家庭で手軽に血圧を測定したいというニーズに応えることで、家庭用血圧計は広く普及してきた。

ユーザー層変化

計器の用途拡大は、どのような変化をもたらすのだろうか。まず、用途拡大はユーザーの変化を意味する。計器の用途拡大は「いつでもどこでも誰でも使用でき、結果がすぐに判定される計器が求められるようになっている」と言い換えることができる。そのため、装置は従来の専門教育を受けた技術者や科学者による使用から、広く一般社会での使用に耐えられるものとなる必要がある。

専門知識が多くない一般使用者の需要に応え、機器が大きく普及するためのカギは、専門知識がなくても安定した結果が得られる機能の搭載だ。具体的にはAI（人工知能）やアルゴリズムで得られたデータの自動判別などである。

次に重要なのは小型化だ。機器が日常的に広く使われるためには、従来の据え置き型や卓上型から容易に持ち運べるポータブル型とすることも求められる。SMBC日興証券では、ポータブル分析機器市場は今後、世界経済の成長率を上回るペースで拡大していくと予想している。こうした変化を背景に大手機器メーカーの競争も変わりつつある。従来の高性能や高機能を中心とした競争に加え、操作性が高く、失敗なく短時間で結果が得られるといった使いやすさが新たな競争の柱になってきている。

各社が資源投入

一見すると、計器需要の裾野拡大は、ユーザーが一般層へと広がることで、製品のコモディティー（汎用品）化を招くようにも見える。参入障壁の低下や価格に対するユーザーの感応度の高まりにより、収益性の低下が懸念されるなど、メーカーには決して好ましい状況ではないようにも見える。

しかし、AIの普及やセンサー技術の進歩により、裾野市場の規模は今後さらに拡大する可能性を秘めている。この機会を見据え、各社が積極的に経営資源を投入し、その果実を獲得することは極めて重要だ。家庭用機器と一口に言っても、とりわけ安全・安心に関わる分野では、機器の信頼性を軸としたブランド価値を構築する余地も大きい。家庭用血圧計で世界シェアトップを誇るオムロンの事例は、その有効性を示す好例と言える。

（隔週水曜日に掲載）

SMBC日興証券
産業・サステナビリティ戦略部
産業調査課
小宮 知希

無断転載・複写禁止

※日刊工業新聞社から著作権の許諾を受けています